

岩手・陸前高田 本県企業が井戸 東日本大震災

# 希望の水必ず

## 疲れ切った人々に—懸命の手助け

東日本大震災の発生から2週間が経過した25日、壊滅的な打撃を受けた岩手県陸前高田市を訪れた。がれきの山が連なる市街地では、いまだ遺体の収容や捜索活動が続く一方、撤去作業が至る所で繰り広げられ、ライフラインの確保や仮設住宅の建設など、被災者の生活再建も途に就きつつある。少しずつだが、復興への動きも見えてきた。

よる災害用井戸設置に向けた掘削作業が行われていた。水道は壊滅状態で自衛隊による給水車だけが頼みの綱だ。避難所に身を寄せる佐々木チエ子さん(57)は「使える量が限られているので洗濯ができない」と嘆く。神田健さん(76)も「洗面も歯磨きも最小限の量しか利用できず、風呂は親戚を頼って5日に1回のペース」。毎日給水がある地上に伸びた管につないだホースからフッシュ、ドボドボという音が長引き、衛生面への不安も出てきている。

市街地を見下ろす高台に、いる。グラウンドでは19日に陸前高田一中、津波などで、始まった仮設住宅の建設が進んだ。家を失った被災者約750む、一角で、日本地下水開発人が生活する避難所になって（山形市、桂木真均社長）

（報道部 堀川貴志、須藤仁、佐藤裕樹）



避難所となっている陸前高田一中の敷地内で、生活用水確保に向けて掘削作業を行う日本地下水開発の社員。25日午前11時59分、岩手県陸前高田市

避難住民が身を寄せる陸前高田一中体育館では、仮設住宅の入居申し込み説明会が開かれていた。安らげる場所を求め、住民からは住宅の早期設置や十分な戸数の確保を訴える切実な声が上がった。

### 「安心できる場を」切実 仮設住宅申し込み説明会

の音が相次ぐ。体育館で避難生活を続けるパート従業員佐々木チエ子さん(60)は「できるだけ早く仮設住宅に住みたいが、われ先とはいかない。苦しいのは昔じ」。夫を亡くした福祉施設職員内藤幸子さん(68)は「着の身着のまま一田も持たずに逃げた。せめて安心して身を置く場所がほしい」と目も涙を浮かべた。市は「避難場ではプライバシーがない。早急に対応したい」と、一日も早い仮設住宅の入居開始に全力を挙げる。だが、職員も割ほどが震災の犠牲になる中、対応に追われた担当職員の表情には疲れが色濃く出ていた。



壊滅しがれきの街の中を、かつての面影をたどりながら歩く地元の家族。25日午後1時34分、岩手県陸前高田市

一方、市街地は見渡す限りのがれきの山だ。撤去作業を繰り広げる重機の姿も確認できるが、高台の避難所から一望する光景はまるで爆撃を受けた跡のよう。避難所で暮らす50代の女性は「本当に元に戻るのかしら」と不安を隠さなかった。

高台から下りて市街地を巡った。住んでた家がなかった場所に出向く人々と擦れ違ったが、一様に疲れ切った表情で、足取りも重たかった。2週間という時間が、人々の生気を奪っているようにさえ感じた。

そんな中、たった一人で散乱物の撤去に汗を流す男性がいた。茨城県石岡市の僧侶田友久さん33。テレビで被害の様子を目にし、「何となくはなして」と思いに突き動かされ、18日に現地入りした。合掌して犠牲者の冥福を祈りながら被災者の深い悲しみを知り、朝から晩まで自力でがれきを片付ける日々を送っている。「かつての街の姿を取り戻すことで、被災者に希望を持ってもらいたい」。復興作業に従事する人々に共通する思いだろつ。